

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 2 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2013

課題番号：21520192

研究課題名(和文) 『今昔物語集』データベース構築に関する研究

研究課題名(英文) Study on Build of "KONJAKU-MONOGATARI-SHUU" Databases

研究代表者

竹村 信治 (TAKEMURA, Shinji)

広島大学・教育学研究科(研究院)・教授

研究者番号：80145705

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円、(間接経費) 810,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、『今昔物語集』研究に有効なデータベースとはいかなるものかを検討し、試案を作成するとともに、課題についても明らかにしようとするものである。そのために、現行諸注釈書の解説、補注、付録資料の全データをテキスト化し、今昔物語集誤読・錯誤事例一覧人物および人物関係総覧以下計4種データベースの作成を試みた。このうち、「定型表現・頻用語彙総覧」については基礎稿を完成。「今昔物語集分類語彙表」、「今昔物語集事項索引」は作業途中である。この間、a言語事象(国語学関連)データベース b話型・モチーフデータベースほか計7種のデータベースの作成にも着手した。

研究成果の概要(英文)：On this project, I make some Databases on the KONJAKU-MONOGATARI-SHUU. For a start, I inputted the data (commentary, supplementary notes, appendixes, etc.) in 5 annotated editions. The next, use them and made some Databases (Mistake phrases, Characters, Stereotyped expressions, etc.) in the process of these works, I made another Databases (Language phenomenon, Stereotype of narratives, Motif, etc.) But these Databases are unfinished. So I intend to continue this project work later.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学、日本文学・古代文学

キーワード：国文学 今昔物語集 データベース 言述研究

1. 研究開始当初の背景

(1) 『今昔物語集』の研究は、芳賀矢一以来の
出典研究、また馬淵和夫らの索引作成、諸
注釈書の出版、そこでの各種付載資料の提供、
資料発掘を通じて格段の進展を遂げている。

ただし、それらのデータを集積し、さらに
テキストの生成に参与した知の総体の俯瞰
をも可能にする、たとえば池田亀鑑編『源氏
物語事典』、『CD-ROM 角川古典大観源氏物
語』のごときものを未だもっていない。その
ため、作品世界の全体像の素描はともかく、
これを成り立たせている知の把握といった
ことになる、その視界が十分に開けている
とは言い難い。視界の開けないまま、成立論、
所収説話の個別伝承論、個別鑑賞、あるいは
作品の構造、もしくは構想をめぐる議論が陸
続と生み出されているというのが現状である。

したがって、『今昔物語集』を成り立たせ
ている知の地平、知識の総体を視野におさめ
るためのデータベースの構築は、『今昔物語
集』研究にとって急務である。しかし、いかな
るデータの集積がこれに有効かについては、
相応の検討が必要である。

(2) また、本研究は、近年、特に近代を対象に
行われているカルチュラル・スタディーズの
実践を背景にもち、これを古典においても実
施しようとするものである。旧来の考証学の
成果を“知の探求”にリンクさせること。狙
いはここにあり、本研究の特色・独創的な点
もそこにある。

(3) さらに、申請者は平成 15 年 5 月に『言述
論』(笠間書院)を上梓したが、本研究はテ
キスト生成の言語過程に注目する言述研究
のケース・スタディとしての位置をも占める
ものである。『今昔物語集』所収説話の一方
は依拠説話とのいかなる対話過程をもって
語られているのか。そこでは何が行われど
のようなことが起り、また引き起こされよう
としているのか。そうした行為、出来事、作用・
効果にかかわるテキスト生成の言語過程の
一連の様態(=言述)を分析することは、そ
のまま語る主体の知の地平、知識の総体、ま
たそれらの変容の動態をさぐる試みでもあ
る。

2. 研究の目的

(1) 本研究の関わる研究史における蓄積とし
ては、たとえば、芳賀ら以来の出典研究があ
きらかにしてきた依拠資料群がある。しかし
それらはテキストをとりまく環境としての
知や知識を伝えるものではない。知られて
いるように『今昔物語集』には依拠資料の
誤読や人名・人物関係・史実・故実・仏教教
義等の無理解による錯誤が多い。その誤読や
錯誤をもたらすものこそがテキストの知の
地平であり知識の総体である。それ故、ここ

での課題に応じうるデータベースとしては
誤読や錯誤の事例を集積、総合、整理したも
のが必要となるが、そうした試みはなされて
いない。

また、言語的な側面では語彙索引、特に自
立語索引・漢字索引もこうした課題にとって
は有効かと思される。しかしこれも語を総覧
するだけでは知・知識を概観する上での用を
なさない。それをたとえば『分類語彙表』等
に則して語彙分類し、他ジャンルのそれと重
ね合わせて有無を一覧したり、あるいは用例
の多い順に並べ替えたり、『今昔物語集』特
有の定型表現を認定整理するならば、それら
は知の傾き、様態をうかがう上でのデータベ
ースとなる。

従来提供されたデータとしては、このほか、
旧版日本古典文学全集『今昔物語集』が各話
解説に示している説話モチーフもある。これ
は昔話民話研究の成果を引き継ぎ集約した
もので、日本古典集成『今昔物語集』の注
記・付録「説話的世界のひろがり」などと
ともに、『今昔物語集』生成の背景にある話
の世界、そこで流通していた話型、さらには思
考、認識の型などを知る便宜を与えている。
ただ、これらの集積だけでは知・知識の総体
ということにはならない。話の世界の話型・
認識モデルを含めた知・知識の総体を相手取
るためには、『今昔物語集』所収各話に語ら
れる生活世界、それは編者にとって既知の世
界であったり依拠説話を通じて新たに出会
われ知られた世界であったりするわけだが、
その具体的な局面のすべてをデータベース
として集積する必要がある。そのためには、
所収話題内の各記事を抽出し、たとえば玉上
琢弥『源氏物語評釈』別巻二所収の「事項索
引」各項などを参考に分類整理するのが有効
だろう。

このように、これまでの『今昔物語集』研
究で蓄積されてきたデータは、それとして多
くの便宜を与えているが、『今昔物語集』の
知の地平、知識の総体についての視界を開く
ためには、そして『今昔物語集事典』に組み
込むためには、なお修訂、再整理を要する。
本研究では、『今昔物語集』研究に有効なデ
ータベースとはいかなるものかを検討し、
『今昔物語集事典』作製にむけていくつかの
データベースの構築を試みようとするもの
である。

(2) 本研究が構築を目指すデータベースは、
『今昔物語集』研究に便宜と進展をもたらす
ばかりでなく、日本文学(史)研究、日本語
史研究をはじめ民俗史・社会史・思想史を含
む歴史研究にも活用されるものと期待され
る。他ジャンルテキストとの知・知識の比較
は、その位相差や系譜を明らかにする中でジ
ャナル論の見直しをうながし、日本文学(史)
の新たな文脈を発見させるだろう。また、
知・知識の様態と使用語彙の傾向、頻度、定
型表現との相関の分析は、M・バフチンの

わゆる「言葉のジャンル」研究、P・ブルデューのいわゆる「ハヴィツゥス」分析に接続して、日本語史研究における位相論にも一つの視座を提供するだろう。あるいは、所収説話の記事の事項分類を基とした、故実書等の記事と『今昔物語集』に語られる民俗・儀礼との比較は、観念化、慣習化した知・知識と現実の生活世界の営み（P・ブルデューの「プラティーク」）との関係の諸相を見えやすくし、さらに、「誤読・錯誤」にかかわっては、史実や思想がいかなる知をもって理解され語り出されたのかの分析を通じて、事象の真実や思想の本義の探求とは別に、事象・思想が人、社会、歴史にとっていかなる意義をにない、その連続がどのような歴史を生み出したのかといった観点からの歴史・思想（史）研究を可能とするはずである。それらは人文諸科学の研究成果と連係させることで、私たちが私たちの「今」を考える際の参照項となっていくだろう。

(3)テキスト生成の言語過程の一連の様態（＝言述）を分析することは、そのまま語る主体の知の地平、知識の総体、またそれらの変容の動態をさぐる試みである。本研究は、データベースの作成を通じてこれらの事象の生じた現場に肉迫するとともに、その言述のすがたをデータベースによって標示することを目指す。それは、これまで物語内容の分類や表層的鑑賞、もしくは話題や編制をもってする作品論とは異なる『今昔物語集』論を可能にするものと見込まれる。

これらの全てを本研究の日程に組み込んでいくわけではないが、そうした目的を実現しうるデータベースの在り方、その可能性について考察することを目的とする。

3. 研究の方法

以上の研究目的に向けて、それを達成しうるデータベースの在り方を検討し、試案を作成するとともに、課題についても明らかにする。

研究計画とその方法は以下の通り。

『今昔物語集』の知の地平、知識の総体を可視化するデータベースの種類の検討

：現行諸注釈書頭注・補注記事・付録資料データベースの作成とその分析

試案データベースA「今昔物語集誤読・錯誤事例一覧」の作成

：現行諸注釈書の頭注・補注に指摘される「誤読・錯誤」の集成および再点検

試案データベースB「人物および人物関係総覧」の作成

：現行諸注釈書の頭注・補注の「人物および人物関係」注記の集成および再点検

試案データベースC「今昔物語集分類語彙表及び定型表現・頻用語彙総覧」の作成

：『分類語彙表・増補改訂版データベース』『CD-ROM 角川古典大観源氏物語』『分類索引』

項目による自立語分類、語彙・表現分析
試案データベースD「今昔物語集事項索引」の作成

：『今昔物語集』記事分析および玉上琢弥『源氏物語評釈』『事項索引』を基とする分類

なお、この検討によっては更に試案データベースを追加することとした。

4. 研究成果

については、

日本古典文学大系：各冊凡例・解説及び解説補記、各巻説話梗概、第1・2・5補注、第3・4・5冊頭注補記、底本・校本存巻一覧、「補注・頭注補記・頭注」要語一覧

日本古典文学全集：各冊解説・凡例、全巻説話解説

日本古典集成：各冊凡例、第1・2冊解説、各冊付録（各話解説：説話的世界のひろがり）、説話的世界のひろがり・見出し索引、頭注索引、図像（京師内外図・登場人物年表・巻25の武者たちと合戦・巻25系図・関東地方豪族国司・将門合戦図・貞任合戦図・京都左京（上）京都東南部地図・京都右京（上）と北山・琵琶湖南方地図・年表「盗・闘」・京師内外図）

新編日本古典文学全集：各冊「古典への招待」・凡例、各冊解説、各冊出典関連資料一覧、各冊人名解説、各冊仏教語解説、各冊地名・寺社名解説、（図像（各冊旧国名地図、第4冊平安京）図

新日本古典文学大系：各冊凡例、各冊解説、各巻解説、第1冊出典考証の栞・出典考証、図像（第1冊古代インド地図・第2冊長安城復元図/中国地名地図）

のデータ入力を了えた。

上記入力データをもとに、

a 言語事象（国語学関連）データベース

b 話型・モチーフデータベース

の作成を試みた。

aについては日本古典文学大系の解説・補注の整理を行ったが、山田文法の記述の再体系化が必要で、『角川古語大辞典』との照合作業中。今後はその作業を継続するとともに日本語学関連論考の研究成果を取り込んだデータベースを構築する。

bについては、日本古典文学全集の解説の類別作業中。日本古典集成の関連解説、関連諸辞典解説を取り込んだ形のデータベースを構築する。

については、各注釈書頭注・補注記事の抽出及び再点検（関連資料のデータ入力、比較検討）を試みた。震旦部は終了。天竺部の作業中。主要先行研究の指摘はデータベース化を終えた。

なお、これにかかわって、国文学研究資料館紙焼き写真版で東洋文庫本（複写禁止）の調査を行った。該本には誤読・錯誤に関する考証書入記事が多い。その書入記事のデータ入力を実施した（巻5まで完了）。

この間に主要なものと認められる事例をもとに成果を公表した。学会等発表の1・2・5・7及び図書の2がそれである。

日本古典文学大系の「校異」記事をもとに、c今昔物語集目録題・各話標題対照一覧データベース（付、諸本校異表示）を作成した。

については、各注釈書解説を集成、統合した形のデータベースを作成した。今後は『国史大辞典』『平安時代史事典』の解説、関連諸論考の研究成果を取り込んだデータベースとして構築する。

については、「定型表現・頻用語彙総覧」を、日本古典文学大系第5巻「要語一覧」、日本古典集成「頭注索引」の集成による基礎稿として完成させた。引き続き頭注・脚注を精査して項目を点検、確定し、データベースを構築する。

「今昔物語集分類語彙表」は、『分類語彙表』による分類を試みたが『今昔物語集』語彙との対応が困難であることが判明。『CD-ROM 角川古典大観源氏物語』のソフト不対応、『日本古典 対照分類語彙表』の発刊遅延もあって、未だ形をなしていない。科研費事業データベース「日本古典対照分類語彙表」による古典語彙の意味論的歴史的研究（代表：安部清成、研究期間2013年4月1日～2014年3月31日）などの成果を活用しつつ、引き続き構築を目指したい。

については、b話型・モチーフデータベース、「定型表現・頻用語彙総覧」、また、「人物および人物関係総覧」に諸尊名を加え、さらに地名等をも組み込んだものとなる。現在、新日本古典文学大系「今昔物語集索引」による自立語データの全入力、諸注釈書頭注・脚注の項目及び注解内容のデータ化を進めているが、それは、d今昔物語集自立語出現頻度データベース
e今昔物語集全注釈書被注語データベースとして構築する予定だが、これをもとに、「定型表現・頻用語彙総覧」の拡充し、「今昔物語集事項索引」掲出項目の精選、解説内容の充実を図りたい。

本研究はデータベース試案作成とともに新たなデータベース構築の可能性とその課題を明らかにすべく始められた。試案で完成を見たものは少ないが、その過程で新たなデータベース（a～e）構築の契機を見出した点は収穫であった。

また、fに関わって国文学研究資料館紙焼き写真版で東洋文庫本（複写禁止）の調査を行ったが、その過程で、該本の書入が近世後期の『今昔物語集』享受史研究の重要な資料となることを見出し、全巻の書写奥書、識語、対校諸本関連書入等の書誌情報の整理、第5巻までの諸本校合記事のデータ化を行った。

これも、この度の研究の成果ではあるが、紙焼き資料の入手が困難で（東洋文庫での1回一部分の複写のみが可能）、東洋文庫での調査そのものが頻繁には行えない事情もあって、現在中断している。今後の課題である。本研究課題とは別に該本の影印公刊の申請などを試みて全体精査への途をさぐり、その中で書入記事全体のデータ化の完成を目指したい。

この度の研究で強く必要を感じたのは、『今昔物語集』の本文校訂の必要である。『今昔物語集』の本文をめぐっては日本古典文学大系がいわば定本の位置を占めるものと考えられ、日本語学研究においてもこれをもとに索引が作られ、語彙や文法事象が検討されるなど、大きな信頼が寄せられてきた。しかし、大系本初版本と後版各本とを比べると多くの改訂が確かめられ、さらに重要なのは、用例の厳密な分析によることではあるが、新たに本文が創造されている場合もある。国名の改訂なども認められる。あるいは異体字の活字化方針も各冊において異なっている。これらはa言語事象（国語学関連）データベースを構築する上では問題である。こうして、日本古典文学大系本はデータベースの依拠本文とすることが出来ない。他の注釈書本文は字体や語法の考訂が甚だしい。漢字の訓も解釈の結果ではあるが各注釈書で異なる場合がある。こうしたことに鑑み、各注釈書の伝本解説による、

f 諸本整理及び本文異同データベースを作成したが、もとより実地の調査を経たものではないので、概況の把握にとどまっている。

本研究の目指す『今昔物語集事典』、そこに取り込むデータベースに正確を期すためには、『校異今昔物語集』の制作が欠かせない。全31巻に及ぶ本文対校は膨大な仕事量になるが、現在はその作業を円滑に進めるための基礎データベースとして、

g 校異今昔基礎データベースを作成中である。日本古典文学大系の収載の「校異」（該本の本文校訂に尽力された酒井憲二の労作）をもとに諸本本文を復元するものである。

なお、現在作成の諸データベースは諸注釈書の作成データを基礎としている。これらの公表の仕方についても今後考えていきたい。

5. 主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計8件）
1. 竹村信治、何を読むのか、日本文学、63-1、査読無、2014、pp.2-17
2. 竹村信治、説話の場としてのテキスト「修身科」教室の「説話」、福岡大学研究

部論集（人文科学）日本文学の書誌学・文献学的研究 A：人文科学編、12-6、査読無、2013、pp. 9-32

3. 竹村信治、「伝統的な言語文化」の掴み直し（下）『伊勢物語』初段、『今昔物語集』「馬盗人」などを例に、論叢国語教育学、8、査読無、2012、pp. 20-31

4. 竹村信治、「伝統的な言語文化」の掴み直し（上）『伊勢物語』初段、『今昔物語集』「馬盗人」などを例に、国語教育研究、53、査読無、2012、pp. 54-62

5. 竹村信治、「内証」の「こと加へ」中世の言述、国語と国文学、88-12、査読無、2011、pp. 1-15

6. 竹村信治、「物深さ」を読み直す『遠野物語』刊行百年の説話学、説話文学研究、46、査読無、2011、pp. 74-84

7. 竹村信治、古典の読解力（充実した読解力養成のために）、学校図書：中学校国語指導シリーズ、査読無、2011、pp. 17-24

8. 竹村信治、今昔物語集の明治、説話文学研究、44、査読無、2009、pp. 9-21

〔学会発表〕（計8件）

1. 竹村信治、誤読論—東アジア言語文化論のために、西北大学学術研究会、2014年3月8日、西北大学日本学研究所（中国・西安）

2. 竹村信治、今昔物語集の誤り、今昔の会、2013年03月28日、水月ホテル鷗外荘（東京）

3. 竹村信治、日韓比較研究の諸問題（コーディネート、趣旨発表）説話文学会12月例会（韓国日語日文学会合同学会・ラウンドテーブル）2012年12月15日～2012年12月15日、韓国崇実大学校（韓国・ソウル市）

4. 竹村信治、説話とメディア 媒介と作用（コーディネート、趣旨発表）説話文学会、2012年06月23日～2012年06月24日、立教大学

5. 竹村信治、今昔物語集の誤り、第27回古典研究会、2011年12月11日、広島大学文学部

6. 竹村信治、「伝統的な言語文化」の掴み直し 古典研究の立場から、全国大学国語教育学会（招待講演）、2011年10月29日、高知大学教育学部

7. 竹村信治、『今昔物語集』と他者のことば、国際シンポジウム「東アジアの今昔物語集と予言文学」、2010年3月19日、北京日本学研究中心（中国・北京市）

8. 竹村信治、パロディと主体、国際シンポジウム「パロディと日本文化」、2009年11月28日、ICUアジア文化研究所（東京都）

〔図書〕（計3件）

1. 説話文学会（分担執筆：竹村信治）笠間書院、説話から世界をどう解き明かすか、2013、562（pp. 42-139、pp. 482-524）

2. 小峯和明編（分担執筆：竹村信治）勉誠

出版、東アジアの今昔物語集（「他者のことば」と『今昔物語集』漂う予言者の未来記）2012、718（pp. 26-54）

3. 小峯和明編（分担執筆：竹村信治）竹林舎、（中世文学と隣接領域1）漢文文化圏の説話世界（「詩書画論の“唐宋変革”と中世日本」）2011、542（pp. 412-443）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

竹村 信治 (TAKEMURA SHINJI)

広島大学・大学院教育学研究科・教授

研究者番号：80145705